

龍馬は か 下田から翔けた

運命の嵐に引き寄せられた、英雄「坂本龍馬」誕生物語



1. 龍馬脱藩



文久2年3月、国の行く末を憂いた坂本龍馬は土佐藩を脱藩します。
当時、脱藩は今の亡命行為にも当たる重罪。龍馬にとっても、正に命懸けの行為だったのです。国を捨て、家族を捨てて脱藩した龍馬の胸中にあったものは「この国を変える」という夢だけでした。

2.勝海舟との出会い



脱藩してから半年後…。幕臣として高名な勝海舟の許を龍馬は訪れます。地球儀を指差しながら「日本なんて小せえ、小せえ、これからは世界よ」と語る、勝の大きさに龍馬は惚れ込みます。そして、勝もまた、龍馬の柔軟な思考と魅力的な人柄に惚れ、2人は師弟の契りを交わしたのです。

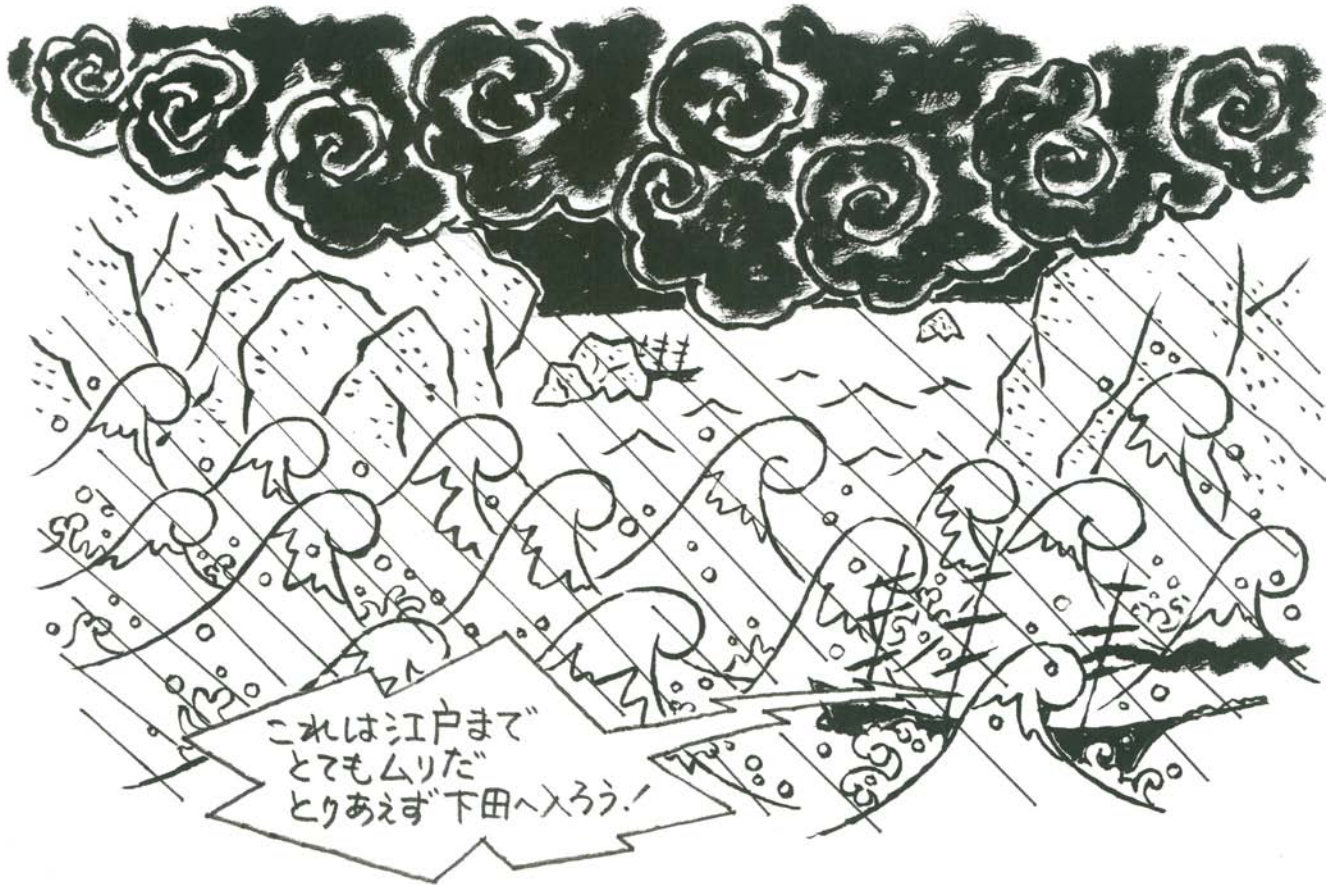
3.不自由な龍馬の船出



勝海舟の弟子となった龍馬は、幕府軍艦「順動丸」に土佐の仲間らと共に乗り込み出航します。しかし、夢にまで見た船出ではありましたが、「脱藩」という罪を背負った龍馬は勝海舟にかくまわれている立場…。

1日も早く勝の役に立ちたい龍馬は、船の上で不自由な身の上を嘆くのでした。

4.運命の嵐



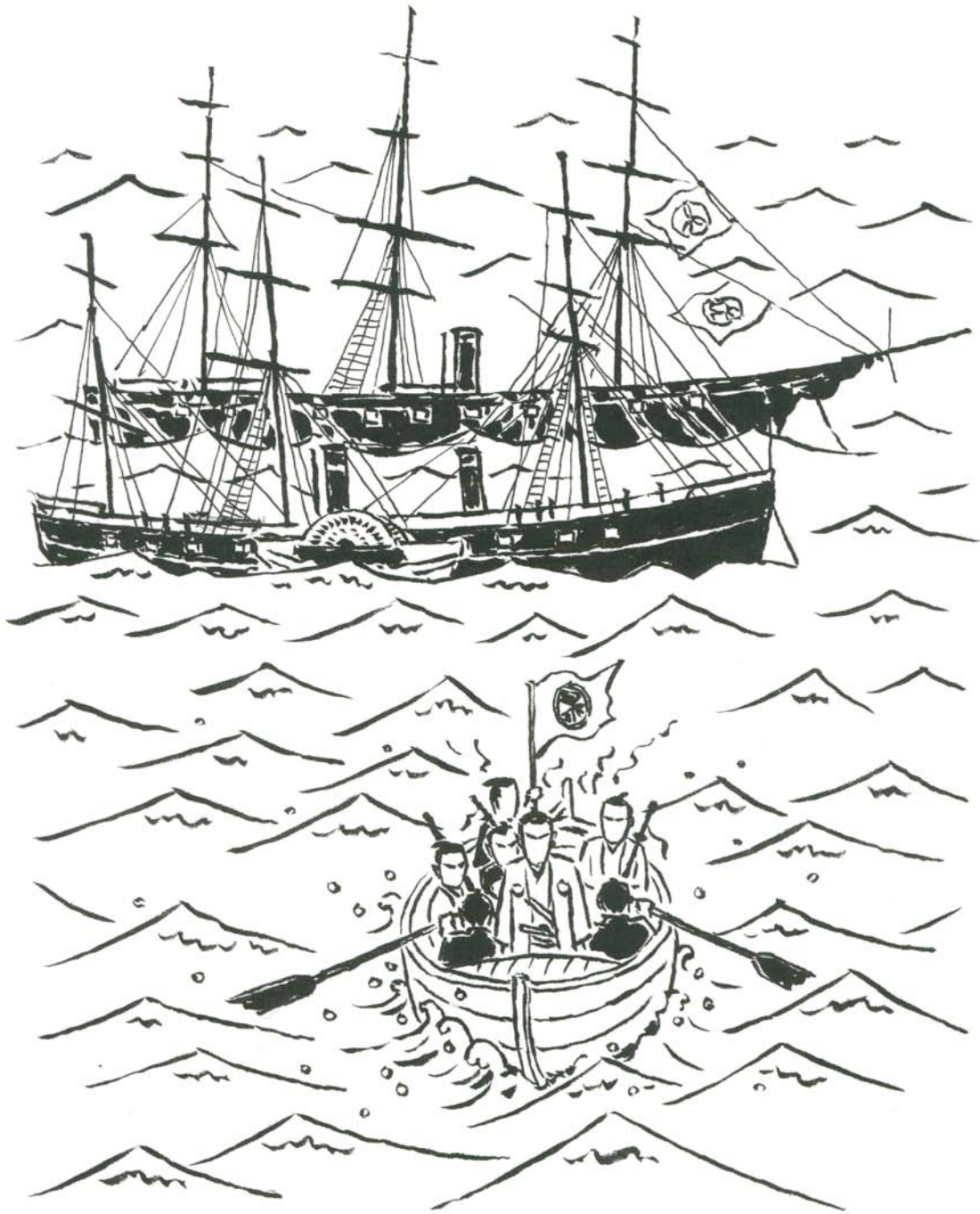
順調な航海が続いていた順動丸でしたが、突然の嵐が襲いかかります。強い雨と風に前進することもままならず、風待ち港「下田」への入港を余儀なくされるのでした。

5.あれに見えるは大鵬丸



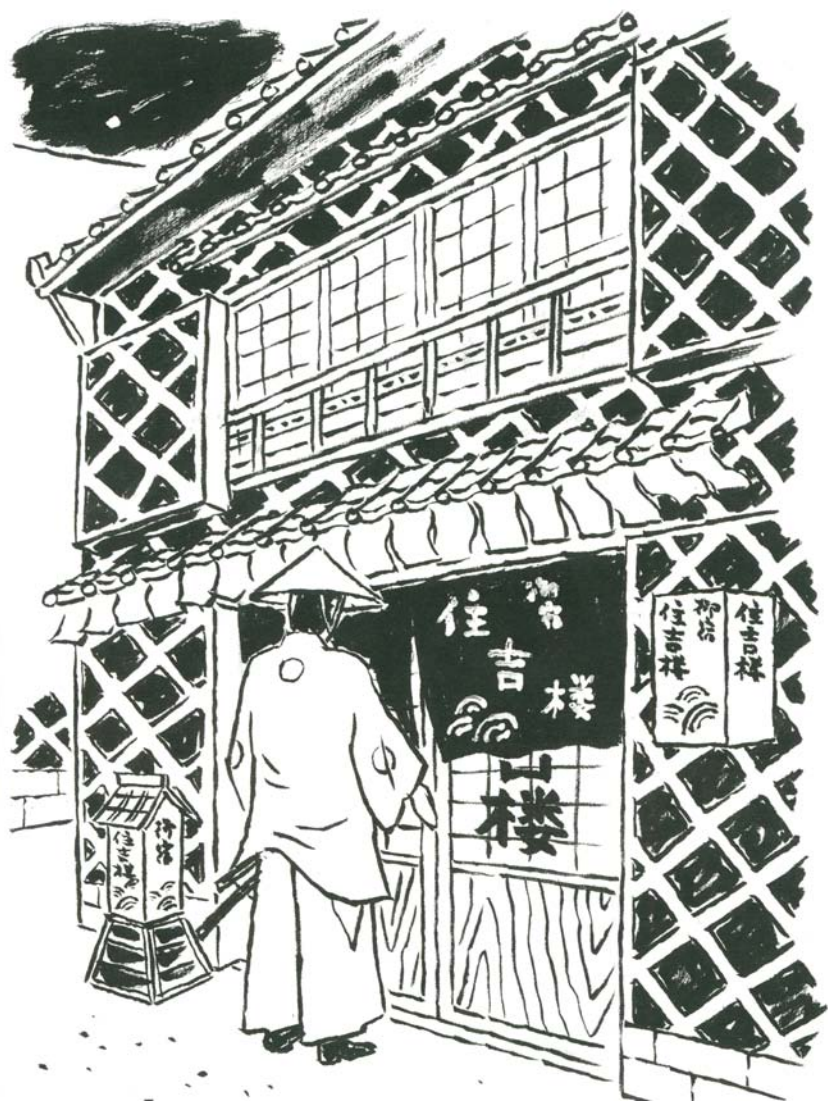
下田港に入港した順動丸が目撃したものは、見覚えのある「三葉柏の家紋」
がはためく軍艦「大鵬丸」であった。

6. 覚悟の上陸



山内容堂侯一行が下田に滞在している事を知った勝海舟は、ある決意を秘め、下田への上陸を決行する。勝海舟に従うのは、坂本龍馬、高松太郎、望月亀弥太、千屋寅之助ら土佐の若者たちであった。

7.いざ宝福寺へ、住吉楼へ待機する龍馬



土佐第15代藩主、山内容堂侯から謁見を所望された勝海舟は、高松、望月、千屋の3名を書生として同行させ、滞在先の宝福寺へ参上した。謁見に同行したかった龍馬であるが、勝の命もあり、「住吉楼」という遊郭で待機していた。このときの龍馬の心中はいかばかりであったのか…。

8.勝海舟、龍馬脱藩赦免を願い出る



謁見に参上した勝海舟は、京坂の状況などを容堂侯に報告し、嵐の中を再び出航し、難破しそうになった大鵬丸の船長などを一喝する。
そして頃合を見はからい、容堂侯に龍馬脱藩赦免を願い出るのだった…。

9.下戸の勝海舟、龍馬の為に酒を飲み干す



脱藩赦免を願い出られた容堂侯は、海舟が酒を飲めないことを承知の上で、「勝、脱藩赦免をしてほしくば、この酒を飲み干してみよ」と朱の大杯に酒をなみなみと注ぎ、勝に差し出し、龍馬脱藩赦免を勝ち取りたい海舟は、それを躊躇することなく飲み干す…。それを見た容堂侯は「勝が飲んだ、勝が飲んだ」と手を叩いて喜んだ。

10. 「歳醉三百六十回 鯨海醉侯」の証



大笑いする容堂侯をじっと見つめ、「酒席の約束事なれば、その証として、容堂様の瓢箪を頂きたい」と、大胆にも容堂侯所有の瓢箪を所望する海舟。「これは、やれん」と白扇に瓢箪の絵を描き、その中に「歳醉三百六十回 鯨海醉侯」と署名して海舟に渡した。その証は、坂本龍馬と勝海舟の絆、龍馬飛翔の原点として今に伝わっている。